【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	熊本県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	大矢野町立大矢野中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	５	５	５	１	１６	３２
生徒数	１７０	１６９	１７８	１	５１９	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

本校の実態に即した
学力向上のシステム化の研究
－自ら学び確かな学力を持つ生徒の育成を目指して－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○　１年生，２年生，３年生・国語，社会，数学，理科，英語
本校の課題である国語，社会，数学，理科，英語について，学ぶ意欲を向上させ基礎・基本の確実な定着を図る必要があるため。

○　１年生，２年生，３年生・音楽，美術，保健体育，技術家庭
心の豊かさ体力の豊かさ及び技能のたしかさ（情意と体力・健康）などが意欲を発現させていくことから，情意面を特に支える「音楽，美術，保健体育，技術家庭」について意欲を高めていくため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○　研究の主眼
学習，評価，研究の３点について本校の実態に即した学力向上のための基本的な在り方としての組織（学力向上のシステム）を構築し各教科での実践を深める。

○　研究の目的
①　生徒一人一人の学ぶ意欲を育て確かな学力の向上（学ぶ意欲の向上と学力保障）を図る。
②　本校の課題である５教科（国語，社会，数学，理科，英語）を中心に確かな学力の向上を図るために，本校の実態に即した学力向上のシステム化の研究を進める。
③　必修教科である他の４教科（音楽，美術，保体，技家）については，情意面での意欲の喚起という観点から研究を進める。
本研究では，「授業力向上」による「学力保障」を，特に研究の視点の１つとする。

○　研究の概要
①　学力向上のシステムの基本構成要素である学習，評価，研究のそれぞれのシステムの構成を図り，これらについて基本的なシステムを構築する。
②　それぞれのシステムでは，研究と実践を重ね，学習指導の工夫改善及び授業力の向上に生かす。
③　中間まとめと研究発表会（中間発表）を行い，参観者より意見，研究への示唆をいただくことで本研究の工夫改善に役立てる。
☆　平成１５年度の重点取組
研究の目的で示した『「授業力向上」による「学力保障」を，特に研究の視点の１つとする。』を受け学習，評価，研究の３つのシステムを実践しながら授業力向上に役立てる。授業力の向上により生徒の学ぶ意欲（能動）を刺激し，基礎・基本の定着を図る。

○　研究内容・方法
学習・評価・研究の３つの部会により研究と各教科による具体的実践を進めている。さらに，各教科では，教科の実態に即した学力向上のシステム化の取り組みも進めている。
①　学習システム化部会における取組
学習システム化部会では，『「授業力向上」による「学力保障」』の視点のもとに

熊本型教育推進による授業改革を中心に，以下の学習システム化による基本実践を進めた。

ア　熊本型教育推進

（ア）授業改革

大研５回，最低１人１回以上の公開授業を行った。特に，徹底指導と能動型学習とのめりはりをつけた授業展開を実践するために，発問・説明・教師の手だてにこだわり教師の発言を厳選し，生徒の思考や授業での発言を重視することで生徒主体の能動型学習を目指し授業改革を進めた。

イ　個に応じた指導の推進

（ア）少人数・ＴＴによる授業実践による個に応じた指導

英語・数学科では，第３学年において少人数による授業，第１学年と第２学年ではTTによる授業の効果的な指導の進め方について研究と実践を行った。

（イ）その他の教科の授業における個に応じた指導

英語・数学科以外でも，個に応じた指導を重視する授業構成を公開授業や日常の授業の中にも取り入れ実践を進めている。

（ウ）授業以外の時間における個に応じた指導

長期休業中にすべての学年がつまづいている生徒への学習会を開催して指導を行っている。

ウ　学び方の指導

（ア）授業の七原則の設定

学び方（行動面）について，本校の実態をふまえこれまでの「授業の四原則」を見直し，「授業の七原則」を設定した。この「授業の七原則」各教室に掲示し各教科，道徳，学活，総合的な学習の時間等すべての教育活動で繰り返し指導を進め定着を図っている。

エ　家庭学習の確立

（ア）学習課題板の効果的活用

各学年に学習課題板を設置し，生徒の自学自習をする態度の育成と家庭学習の確立を進めている。

（イ）学習の手引き

各教科における「授業」や「家庭学習」の学び方の指導や家庭学習を推進するためにも「学習の手引き」を作成を進めている。

ウ　家庭学習実態調査

本校生徒の家庭学習状況をテスト前１週間とテスト後１週間について定期的に実態調査を行い家庭学習の状況について分析を行った。これにより，家庭学習の定着に向けた課題の出し方，自学自習の指導の進め方について改善を進めた。

②　評価システム化部会における取組

評価システム化部会では，単元の指導・評価計画の作成の工夫改善を中心に，以下の評価システム化による基本実践を進めた。

ア　ゆうチャレンジ・学力診断テストの分析と活用

（ア）ゆうチャレンジ・学力診断テストの分析を行う。

（イ）分析結果は，学習システム化部会で検討し，具体的に活用する。

単元の指導・評価計画で設定した到達目標に対して，単元(小単元)ごとに確認テストを実施し判定を行っている。確認テスト後の定期テストでの変容なども分析し確認テスト後の指導が効果的であったかを確認している。

イ　教科の到達度基準の設定と一人一人の判定

（ア）到達度基準（到達目標）の設定

単元の指導・評価計画に到達目標を設定し，生徒も自己評価など実際に活用できるように作成した。また，単元の発展的内容についても記述した。

（イ）一人一人の判定

単元の指導・評価計画で設定した到達目標に対して，単元(小単元)ごとに確認テストを実施し判定を行っている。

ウ　評価問題作成と個人カルテ作成の工夫

（ア）ゆうチャレンジの手法を生かした問題作成

定期テストなど各種問題作成にあたっては，観点別の問題作成はもとより国語・数学・英語科については，ゆうチャレンジの手法を生かした問題作成を行っている。関心・意欲・態度を測る問題作成を行いこれまでの問題作成観を改革することで，生徒が自ら進んで問題解決に取り組める評価問題の作成に各教科とも取り組みを進めている。

（イ）個人カルテ作成の工夫

生徒一人一人の授業や定期テストの評価，到達度判定の結果等は，各教科ごとにまとめを行っており学校全体として取り組めてはいない。来年度からは，大矢野町教育委員会の委託で開発された評価ソフトも活用し，授業や定期テスト，到達目標の判定結果等の評価やその活用，また大矢野中学校の学習の評価から評定までの学校全体としてのシステム化を進める。

③　研究システム化部会における取組

研究システム化部会では，『「授業力向上」による「学力保障」』の視点のもとにどのように研究をシステム化すればよいかを熟慮し，授業力向上を中心とした研究システム化を進めた。

ア　研究推進システム化

２学期より毎週水曜日の職員朝会の時間を校務分掌会の時間とした。教科部会を中心に研究の打ち合わせの時間とし，必要に応じて研究推進委員会や各システム化部会を開催している。

イ　授業研究システム化

本校の研究授業・公開授業，授業研究会においては次のシステムで取り組みを進めている。

（ア）授業者は，学習システム化部会で提案された発問・説明・教師の手だてを重視した授業づくりと，指導案の作成を行う。

（イ）授業参観者は，「授業への私の思い１０項目」をもとに授業を評価する。

（ウ）授業研究会では，「授業への私の思い１０項目」をもとに授業改革を進める。特に授業者は，「つけさせる力はなにか」，「意欲を高めるためにどう工夫したか」の２つの視点でどのように授業づくりをしたかを説明する。

授業改革については，生徒による授業評価の導入を１２月より試験的に実施しているが，実施方法や効果については十分な研究ができおらず，来年度より確かなシステムとして導入したい。

また，授業改革の一環として本校学習指導カウンセラーの吉田道雄先生のご指導のもと教師の対人関係トレーニングにも取り組んでいる。

④　システムの一体化

学習・評価・研究システム化部会の３つの部会においてそれぞれ進められた研究と実践の一体化として，現在次の学力向上のシステム化（一体化）のもと実践が進められている。

・システム化①：到達目標の設定から定着までのシステム化
・システム化②：研究授業から定着までのシステム化
・システム化③：授業から家庭学習へのシステム化

平成１５年度は，学習・評価・研究システム化部会の一体化として，３つの学力向上のシステムとしての一体化した取り組みを共通実践している。この３つのシステム化により全学年，すべての教科で，たとえ指導者が違っても共通実践を進めていける。この共通実践は，大矢野中学校の一人一人の生徒の学ぶ意欲の向上と表現・処理，知識・理解の点において基礎・基本の徹底を図る上で最初の基盤となっている。

⑤　音楽・美術・保健体育・技術家庭における取組

ア　４教科合同部会の基本的な考え

「学校生活に活力を与える４教科部会」を合言葉に，各教科「学力とは何か」を明確に打ち出し，日々授業実践を基盤とし，多角的・総合的な面で学校生活の礎となることを研究の視点に捉え取り組んでいる。

イ　教科における学力とは

（ア）音楽・・・・・表現力

（イ）美術・・・・・自分の思い願いを込めて表現する力美しいものや，有名な画家の作品や歴史上の遺産などを鑑賞する力

（ウ）保健体育・・・心身の健康と体力の保持増進を目指した実践力

（エ）技術・家庭・・・生活における実践力

ウ　４教科合同部会のねらい

４教科が連携し合うことにより，４教科から生み出されるそれぞれの力を身につけさせることにより，学校生活全般に大きな活力（影響力）を吹き込む。

エ　研究に関しての仮説

４教科の授業を充実させそれぞれの教科で身につけるべき力を育む。

⇩

授業を発展的に捉え校内行事等との関連を充実し，できばえや成果から生徒の達成感や充実感を味あわせる。

⇩

学校生活に活力が出れば出るほど出るほど，学習に対する姿勢や取り組みも増し，４教科のみならず他教科においても学力が向上するであろう。また，自らの自信の向上につながり更にそれぞれの教科が育む力が増大するであろう。

知・徳・体の統合としての学校生活の活性化から学力の向上を目指す。

オ　取り組みについて
（ア）年間指導計画・単元計画・評価基準表等の見直し（各教科）
（イ）授業の充実（各教科）
（ウ）授業の中での作品づくり等の積極的導入（美術、技術・家庭）
（エ）授業の中での発表会、競技会等の積極的導入（音楽、保健体育）
（オ）校内活動（行事等）をにらんだ４教科合同部会の取組
a　体育大会
体育大会では，ただ単に保健体育科としての発表会，競技会だけでなく４教科の要素を十分出しあい，連携を取りながら進めている。それぞれ，競技運営の他に準備段階で以下の体勢を取っている。
(a) 製作グループ（技術・家庭，美術）
・ものづくり　　・生活の自立と衣食住
(b) アートグループ（美術，技術・家庭）
・表現　　・ものづくり
(c) スタンドグループ（技術・家庭，美術）
・情報とコンピューター　　・表現
(d)　演技グループ（音楽，保健体育）
・表現　　・ダンス
b　文化祭　　c　合唱コンクール　　d　校内駅伝大会
e　写生大会　　f　その他

４教科の要素を十分出し尽くすことにより，生徒のやる気や環境面での充実を図り生徒の達成感や充実感をより強く出せるように心がけている。

平成16年度

○　研究の主眼
学習，評価，研究の３点について本校の実態に即した学力向上のための基本的な在り方としての組織（学力向上のシステム）について工夫・改善を進め，さらに各教科の共通実践としての学力向上のシステム化を進める。

○　研究の目的
①　生徒一人一人の学ぶ意欲を育て確かな学力の向上（学ぶ意欲の向上と学力保障）を図る。
②　本校の課題である５教科（国語，社会，数学，理科，英語）を中心に確かな学力の向上を図るために，本校の実態に即した学力向上のシステム化の研究を進める。
③　必修教科である他の４教科（音楽，美術，保体，技家）については，情意面での意欲の喚起という観点から研究を進める。
本研究では，「授業力向上」による「学力保障」を，特に研究の視点の１つとする。

○　研究の概要
①　学習，評価，研究の各システムを構成する項目を焦点化し基本構成要素がより効果的になるように実践的研究を深める。
②　学力向上のシステムとしての精度を向上させ授業力の向上，生徒一人一人の確かな学力の向上（学ぶ意欲の向上と学力保障）を目指す。
③　学力向上のシステムが本校独自のシステムとして効果的であるか検証する。
④　研究のまとめと研究発表会を行い，参観者より意見、研究への示唆をいただくことで本研究の工夫改善に役立てる。

(3)　研究推進体制

○　研究組織図

○　研究体制上の工夫
全体会において，研究・学習・研究システム化部会から研究及び実践について提言をうけ共通理解を図る。各教科部会では，教科の実態に即し実践を進める。さらに，各教科での実践上の成果と課題を全体会・各部会に報告し工夫・改善を進めている。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

１　研究の成果

（１）学習システム化としての成果

ア　授業改革の実践を通して，日常の授業においても徹底指導と能動型学習とのめりはりをつけた授業の展開について教師の意識改革が進められつつある。

イ　本校の実態に即した学び方や家庭学習の定着に向けての課題と課題解決に向けての取り組み（システム化）の方向性が明らかになりつつある。

（２）評価システム化としての成果

ア　到達目標の設定と一人一人の判定により，単元ごとのつまずきが明らかになり個に応じた指導への提言へとつながってきている。

イ　評価問題作成について，ゆうチャレンジの問題にならうなど，それぞれの教科で工夫改善が進められるようになった。

（３）研究システム化としての成果

ア　授業参観者や生徒からの授業評価を積極的に取り入れることにより，授業改革，意識改革が進められつつある。

イ　教科部会の時間設定など研究推進に向けてのシステム化を図ることができた。また，４教科（音楽，美術，保体，技家）の教科横断的指導体制ができつつある。

（４）学力向上のシステム化（一体化）としての成果

３つの学力向上のシステム化（「システム化①：到達目標の設定から定着までのシステム化」，「システム化②：研究授業から定着までのシステム化」，「システム化③：授業から家庭学習へのシステム化」）ができ生徒の学力向上を目指せるものとなってきた。定着については，その成果として平成 16 年４月に実施される学力診断テストで検証する。

２．今後の課題

（１）学習システム化としての課題

ア　大矢野中学校全体として，また各教科として「徹底指導」と「能動型学習」を実践しているがめりはりをつけることの難しさを感じている。またそのシステム化も，検討中である。今後さらに研究を深め，意識改革と授業力向上を図りながら大矢野中学校の実態に即したシステム化を進めたい。

イ　数学科，英語科における少人数，ＴＴによる授業がより効果的な実践になるように工夫・改善が必要である。その他の教科においても，個に応じた指導について推進していく必要がある。また，授業以外で個に応じた指導をどのように進めるか具体的方法や時間設定が必要である。このことについては，研究システム化部会と連携し時間設定等も検討を進めていく。

ウ　授業における行動面での学び方の原則を提示はしているが，このことについて教師の指導の評価や生徒の自己評価などは，できていない。教師の指導という面と生徒の自己評価の面で授業の原則が定着しつつあるのか検証し徹底に向けての改善が必要である。学習の手引き等も来年度４月から活用できるように，研究を深め作成を進めたい。さらに，内容を定着させるための原則の検討や，生徒自らが学習に取り組む原則などを考える場の設定なども進めていきたい。

エ　家庭学習状況の分析から十分に定着しているとは言えない。今後は，家庭学習の定着に向けた具体的指導方法と学習課題板の効果的な利用方法について改善を進めたい。また，学校全体として家庭学習を３年間でどのように指導し生徒の自学自習を促すのか，明確にし指導を進めたい。さらに，家庭との連携を深め家庭学習を推進するシステムを構築したい。

（２）評価システム化としての課題

ア　ゆうチャレンジ・学力診断テストで分析したことを，具体的に活用でき効果が上がるよう研究中である。指導計画への位置づけや授業での活用，個に応じた指導への活用など効果的に活用できる可能性を模索し実践的研究を進めたい。

イ　単元の指導・評価計画に毎時間の到達目標を記述しているが，授業での活用が十分にできているとは言えない。また，生徒の自己評価等にも活用ができていない。今後，一人一人の到達目標に対する判定とその後に指導について確実に実践をしたい。また，指導計画・評価基準の改善は，今後も積極的に進め，各教科で実際的に活用できるものを研究していきたい。発展的な内容については，教科書との関連や高等学校との関連も考慮し教材開発を進める必要がある。

ウ　各教科観点別の問題を作成しているが，まだまだ改善すべき点が多い。今後，ゆうチャレンジの手法を生かした問題作成については，各種テストも参考に評価問題の工夫改善を進め生徒の意欲を高める問題作成を進めたい。

エ　授業における評価や各種テストの結果等をもとに，大矢野町教育委員会の委託で開発された評価ソフトも活用しながら生徒の変容や分析を行い，指導に生かしていきたい。

（３）研究システム化としての課題
ア　各教科，各システム化部会の研究の打ち合わせや議論をする時間の設定が大きな課題である。生徒と実際的に関わる時間を確実に確保し，かつ効率的に研究を進めていくために年度当初よりすべての教育活動を見通して，校務分掌の在り方・研究の体制の強化を図っていきたい。
イ　現在の日課表や時間割では，授業以外での個に応じた指導の時間を設定できていない。弾力的な時間割の工夫や日課表の見直しにより，授業以外で生徒の個に応じた指導の時間の設定を進めていく必要がある。
ウ　研究推進と教育課程，学校行事の実施をしていく上で一つ一つの教育活動を充実させることができていないように思われる。何が生徒にとって必要な学校行事であるかの視点より，学校行事の厳選を進め生徒がじっくりと意義のある活動ができる教育課程の編成を進めなければならない。
エ　学習・評価・研究システム化の３つの柱で研究を進めてきているが，保護者や地域との連携，生徒会活動の活性化を通しての学力向上も考えられる。研究組織や研究の方法なども改善すべき点は，積極的に改善をしていきたい。
（４）学力向上のシステム化（一体化）としての課題
学習・評価・研究のそれぞれの基本的なシステムの構築を行ってきた。そのために，一つ一つの取り組は浅いものになっている。今後，取り組みの焦点化を進め本校の実態に即したより精度の高いシステム化を図り実践を進めていく必要がある。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

１　基礎・基本確認テスト
単元の学習内容が定着しているかを判定することと定着状況の変容を把握し，個に応じた指導を進めるために各単元ごとに実施をしている。
２　家庭学習実態調査・意識調査
家庭学習の実態を把握し，指導の工夫・改善を進めるために学期末テストの前後１週間ずつ実施している。
３　授業における意識調査
学習内容の定着や学習方法など生徒の意識としての実態を把握し，指導の工夫・改善を進めるために１２月に実施した。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　大矢野町の小中学校の交流事業で研究授業を行った。
○　研究成果の普及のためにホームページの作成と充実に努めた。
○　平成１５年度１年次研究（中間）発表会
・平成１６年２月１８日（水）
・天草地区・宇城地区を対象の中心に公開授業・研究授業，研究発表を行った。
○　天草地区の各小中学校に研究紀要を配布する。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□ ３学級以下　□ ４～６学級
□ ７～９学級　□ １０～１２学級
□ １３～１５学級　☑ １６学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導
□ その他

【研究教科】　☑ 国語　☑ 社会　☑ 数学　☑ 理科
☑ 外国語　☑ 音楽　☑ 美術　☑ 技術・家庭
☑ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無